八戸市立 **市川中学校 学校だより「じょ」**

平成27年7月2日(木)

校長通心 No.47 校長 馬渡教二

七夕風景 （宮澤章二）

銀色に澄む天の川を渡って
一年に　ただ一度だけ
二つの星は会うのだ　という

残りの三百六十四日
星は孤独に泣いて光るのだろうか
たぶん　そうではないだろう

自分が生きることは
相手を生かすこと
相手を生かすことは
相手に生かされること

互いに光り合ういのちの意味を
星たちは何億年も考えている
何億年も考え　つぶやいている
――生きる　生かす　生かされる

1学期、絆シャフトのしめくくりは「合唱コンクール」

夏季大会が終了した。野球部・ソフトテニス部女子の優勝、サッカー部の準優勝、そしてソフトボール部・ソフトテニス部男子・剣道部男子の3位。個人種目もたくさんの人たちが入賞（裏面参照）に輝いた。そして、数々の感動場面や爽やかシーンを共有してきたと思う。今回の開会式では、**応援団に「ヤーヤードー」の「市川魂」が加わった。**本部席から見ていると躍動感とエネルギッシュさで他を圧倒し、**生徒会テーマの「イノベーション!!」まさに「革新」を感じた瞬間だった。**どの部活も目標は勝利を目指し、真の目的はもうひとまわり大きな自分になることだったはずである。だとすれば、勝っても負けても大会を終えた今、**関わってくれた全ての人たちへの感謝、そして仲間との絆を忘れてはいけない**と思う。

そして2次考査も終了。夏季大会に向けた「武の車輪」と同じように「文の車輪」を回せただろうか？**今年の市川中の課題は、文武の両輪を「バランスよく回す」こと**だったのを忘れてはいけない。**力を持っている人間や結果を出す人間というのは実に切り替えが早い。自分自身でスイッチを切り替えることが出来る。**いつまでも過去の栄光にしがみついていてもいけないし、いつまでも取り戻すことのできない結果を悔やんでいてもいけない。常に未来を見なければ…。**次の一歩を踏み出さなくてはいけないのだ。3年生であれば、進路実現に向けての努力。部活であれば、勝ったチームは県大会に向けたステップアップ。新チームは、新たなる目標設定と、その実現に向けた第一歩。学級であれば合唱コンでの美しいハーモニーづくりと、強固な団結力。**やらなければならないことは山積み……である。

一学期をしめくくる合唱コンクールが2週間後に迫ってきた。マラソンランナーだった増田明美選手が初めて駅伝に出場したときに「マラソンに比べて、今日の優勝はどんな気持ちですか？」とインタビューされた。彼女は「はい、9人で走りましたので、喜びも9倍です」と答えたという。たぶん合唱も、「一人で歌うときよりも30人で歌ったので、喜びも30倍です」となるような気がするけれど、逆に社会的手抜き（リンゲルマン効果ともいう）も起こりやすい。**みんなで力を合わせれば大きなパワーが生まれることは揺るぎない事実**なのだけれど、例えば綱引きをするときに人数が増えれば増えるほど一人当たりの引っ張る力が減っていくという実験結果もある。**集団で協力して作業すると、メンバーそれぞれが、どれだけ成果に貢献しているのかがわかりにくくなるため、「サボってもかまわないだろう」という心理が働き「手抜き」につながっていく**のだ。駅伝のように、一人一人が自分の成果をフルに出してタスキを繋げていくのと違って、合唱はどちらかというと綱引きタイプである。だから**中学生にとって、この合唱コンはそれぞれのクラスの集団力・団結力を試される行事**と言っていい。**本物の「絆シャフト」をつくるための通過点**といっていい。だから、**一人一人が合唱を創り上げるための「エンジンである」と自覚する**必要がある。自分は合唱づくりの「歯車の一つなんだ」と感じたとたんにせっかく持っている能力はその集団に使われなくなってしまうような気がする。**自分の内部エンジンで自分自身を動機づけられる力が中学生には必要**なのだ。**この力を鍛え、身に付けることが出来れば、文武の両輪を「やらされて回す」のではなく「自ら回す」ことができるようになる。**そうしたら、その効果が何倍にもなっていくのである。

合唱コンクールの意義と喜びは、声を合わせハーモニーを創り上げる心地良さだけではなく、心を通わせ、それぞれの価値や意識を共有することにあると思う。ハーモニーの完成度を上げたり、よりより表現を目指し話し合ったり、議論し合ったり…、そういう時間の中で起こるイライラやゴタゴタやモタモタやドタバタ…。その中にこそ、合唱コンクールの意味があるのだと思うし、それを乗り越えるからこそ、終わったときに充実感や達成感がやってくるのだと思う。**それぞれの学級集団が大きく成長（強靭な絆シャフトを創り上げる）するチャンスである！！**

合唱コンクールだけじゃなく、それぞれの行事でそれぞれのリーダーが同じ悩みを背負うんだと思う。でも、終わった後に、苦労した以上の手応えを感じた人はまた、リーダーに憧れるはずである。それだけ「リーダー」とは、難しく、やりがいがあり、魅力のあるものである……。

司馬遼太郎の小説に「燃えよ剣」というのがある。剣に生きた男を扱っていて、新撰組の土方歳三を描いた作品である。題名だけみると、チャンバラ物語というような印象を受けるが、実は作者の司馬さんはこの作品で土方の組織学について語り感嘆している。日本人は曖昧で、物事をあやふやにする癖がある。江戸幕府の「二員制」がそうであったように、ひとつの役職に二人の人間が就くと、平常時は、その方が人員の補給に便利かもしれないが、黒船来航などの緊急時には迅速な行動ができない。誰に責任があるのかわからないから誰も解答できず、外国は業を煮やす。そもそも日本というひとつの国の中に、将軍と天皇という二人の統治者がいることが余計に外国を混乱させた。こういった弊害を見抜いた土方は、最初は副組長は二人だったが、片方を名目上だけ偉くて実権は何もない役に就けて命令がひとりの人間から発せられるようにした。新撰組は、当時としては最強の人間集団であったが、その機能を裏づけたのは、隊士に対する厳格な決まりごとである。当然それを隊士は嫌がるが、そういった命令を土方は何度も発した。だから土方は新撰組では嫌われ者であった。しかし、もし土方が隊士からの評判を気にして命令を出さなくなったら、どうだろう？その命令は代わりに組長の近藤勇が出さなければならない。組長がみんなの不評を買っていたのでは、組織は動かなくなる。土方はそれを知っているから自ら損な役を請け負ったのである。…思うに、本当にその組織に貢献している者は、嫌われ者が多いのではないだろうか？日本の歴史の中で最も重要な役割を果たしたと言われる徳川家康と大久保利通はどちらかというと不人気なような気がする。

さて、リーダー諸君！！勝負のときがきた！！